

<その5>

地球と眼球

鈴木秀夫（地理）

人が狭い谷底の村で生活している間は、過去にすぎさったいろいろな出来事の多様性に興味を感じているから、歴史学がまず発達する。

村を離れて都会に集まるようになって、多県の人を知り、更に生活の空間が海外にまで広がると、空間における多様性に関心が移ってくる。

実際、例えばアフリカの砂漠に行くと、日本では見なれぬ形の山を背景にわれわれは異質な生活している人々をみると、あまりの違いに、ほとんど茫然としてしまうことがしばしばある。

そういう時に、その土地の人々は、われわれに話しかけてくれる。その話の内容は、われわれの常識を越えている。そこで文化人類学が成立することになる。

それに対して、背景の山は黙ったままである。その山には、環境の変遷の歴史が刻み込まれているのであるが、時としてその解説は遅々として進まず、いたずらに調査時間が過ぎていくことがある。対象によっては、採集して研究室に持ち帰って分析を続けることができるが、山は持つてくることができない。

人間の多様性を自然環境の変遷のなかで理解しようとする地理学には、より多くの時間を要することになる。

一地点の自然環境の変遷は、他地方との関係で説明されることが一般である。例えば、旧石器時代人と新石器時代人の活動の舞台となったサハラには、その時、雨が降って草原であったが — 緑のサハラと呼ばれている —、その雨の原因には、南極大陸の上の氷の増減が関係していると考えられており、その南極大陸上の氷の厚さの分布は、ヒマラヤ・チベット山塊の存在によってきまっていると考えられている。

地球上のすべての点は、このようにすべて不可分に結びついているから、例えば南米のアタカマ砂漠の山の形を調べている間にも、マダガスカル島西岸の状況が気になってくる。

直径数センチで、しかもすみずみまでいつでも調べることができる眼球を研究する研究者が沢山いるのとくらべて、地球を研究する研究者がひとにぎりしかいないことの対照をしばしば考える。それだけにまた、やりがいを感じているのだが。